



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3751 号 2017.7.3 発行

うちの子 ダウン症ですが



女の子は今、4歳になりました。自宅近くの保育園に通っています。まだ、言葉で上手に気持ちを伝えることができません。



の「ん」。女の子の名前は、杏ちゃん。4歳です。

ひとつひとつのことを最初から最後までやりとげる子になってほしい。生まれてきた子



NHKニュース 2017年6月30日

「わが子をほかの子と比べてしまうんです。それが嫌で、親子で外出するのを長くためらっていました」

生まれてすぐ、ダウン症と診断された女の子の母が語る、胸の内。

「ダウン症がどんなものかわからず、”障害”という漠然としたイメージが頭に浮かんで…。娘や自分や家族のこれからを思うたび、涙が出ました」

「同じ年頃の子どもたちの中で、自分の意思を“伝える”力を身につけてほしい」今、母が娘に寄せる思いです。

母の気持ちを変えたのはなんだろう？ 女の子はどう過ごしているんだろう？。“伝える”ってなんだろう？ カメラマンの私は、レンズを通してふたりを見つめ、考えました。(仙台局・田中涼子カメラマン)

わたし 障害児の母？

五十音で一番初めの「あ」。一番最後

の前につけました。

伊藤廉さんといづみさん夫婦は、医師から、生まれたばかりの杏ちゃんがダウン症だと告げられ、「同年代の子に比べて、体の成長や知的発達に遅れがでる」と言われました。

“障害児の母”となった、いづみさん。町を歩いているときに目にとまるのは、お座りしたり、歩いたり、おしゃべりしたりする、杏ちゃんと同じ年

頃の子どもたちばかりだったと言います。

「障害がある子どもを持ったことで、社会から隔離されたと感じていた」

いづみさんと杏ちゃんは、家にこもりがちになりました。

**杏ちゃん チョコになる**



3年前から杏ちゃん家族は、休日にダンスを楽しんでいます。ダンスを通じて、障害がある人もない人も交流しようと仙台市のNPOが開く「オドリノタネ」に毎週参加しています。

ここで披露されるダンスは一風変わっています。

「きょうのお題はチョコレート！」

誰かが言うと、参加者はみなそれ

ぞれ、体いっぱい「チョコレート」を表現します。

溶けるさまを表しているのか、体をくねくね揺する人。手のひらをチョコレートに見立てたのか、手をかじる人もいます。

そのとき杏ちゃんは…。

あちこち歩き回っては、向き合った人の前で立ち止まり、顔を見上げています。

「杏ちゃんは何を表現しているんだろう？」

しかし、まだ言葉が上手に話すことができない杏ちゃんに、答えを求めることはできません。

「これってもしかして、チョコレートちょうだい？」

何かを表現しようとしている姿をレンズ越しに見続けていた私には、杏ちゃんの「チョコレート」が、伝わってきた気がしました。

さらにこの後、私は、杏ちゃんといづみさんが変わるきっかけとなった“瞬間”を記録することになりました。

## 2秒のしぐさ

踊り終えて、いづみさんのもとへ歩み寄る杏ちゃん。

「よくがんばったね」と、いづみさんが抱きしめます。体を離れた次の瞬間、杏ちゃんは、いづみさんの目を見つめながら、自分のほほの辺りを指差し、首をかしげます。何かを伝えようとする、2秒に満たない、このしぐさ。言葉はありません。

杏ちゃんがここに通い始めたのは、1歳半のころ。通い続けるうちに、杏ちゃんは体を使って気持ちを表すことが、次第にできるようになったと言います。

ダンスを通じて、少しずつ成長する杏ちゃんの姿に、いづみさんの気持ちも次第に変わっていきました。



「確かに発達はゆっくりで、歩くのがゆっくりだったり、言葉を話せるようになるのが遅かったりするけど、それが障害かって言われると、そんなこともないような気がしてきて」

## 私の弟 ダウン症です

レンズを通して見つめてきた、杏ちゃんといづみさんの姿。次第に、カメラを持つ私自身と、私の弟の姿に重なっていくような気が

しました。

私の弟は、ダウン症です。

22歳の彼は今、実家がある山口県で、清掃作業の仕事をしています。

彼がちょうど、杏ちゃんと同じ年の頃。夜、布団に入った私の枕元に、大好きな絵本を手にした弟がよく立っていたことを思い出しました。

彼が何を訴えているのか、まだ幼かった私にも十分伝わりました。

言葉でなくとも、体や表情から伝わるものがある。私がカメラマンとして映像の世界に飛び込んだのも、この思いからでした。



#### プルーンとブランコ

杏ちゃんは、友達とどうやって思いを伝えあっているのか。

私はカメラを持って、杏ちゃんが通う保育園に向かいました。

おやつ時間。プルーンが入った袋を開けることができない杏ちゃん。隣の子に、両手で袋を差し出し、ぺこりと頭を下げて、開けてほしいと伝えます。渡された隣の女の子は、黙って袋

を開けます。プルーンは再び杏ちゃんの手に戻り、口の中へ。

休み時間。杏ちゃんはブランコに乗って遊んでいました。そばには、男の子が順番を待っています。1回、2回、3回、…とこいでいた杏ちゃん。突然、ブランコを降りて、男の子にゆずってあげました。

言葉ではない方法で、子どもたちどうし、思いを伝え合う姿がありました。

#### 杏ちゃんへの願い

取材中、杏ちゃんの母いづみさんは、私にこう話してくれました。

「杏自身、今、自分が障害があると思っていない。みんなと同じだと思っているはず。相手を尊重して、自分の気持ちも相手に伝わるような努力を重ねて、人としての基本的なコミュニケーションを身につけてほしい」

#### “伝える”ということ

カメラを担ぎ始めて2年目。まだまだひよっこカメラマンの私は、今、“伝える”ことの意味と毎日向き合っています。

取材を通して知り合った杏ちゃんといづみさんの姿は、私に“伝える”ことの難しさと大切さを教えてくれました。思いがあれば、伝わる。思いがあれば、伝えることができる。どんな形であっても、相手の思いを精いっぱい想像できる自分でありたい。

杏ちゃんに教えてもらった“伝える”ことの意味を、これからもカメラマンとして、ずっと考え続けたいと思います。

#### 子どもと死別「ひとりじゃないよ」 家族の思い冊子に朝日新聞 2017年7月3日

病気や事故で大切な子どもを亡くした家族に伝えたい。「ひとりじゃないよ」。そんな思いが込められた冊子ができた。病気の子どもの家族に寄り添った活動を続ける九州大の研究者らがまとめた。亡き子への思いがあふれている。

「もし願いが叶（かな）うなら、りいちゃんのお母さんになって、今度こそはりいちゃ

んの子育てをしたい」

福岡市南区の札幌景子さん（39）は、冊子「空にかかるはしご 天使になった子どもと生きるグリーフサポートブック」に寄せた手記にそう記した。

「空にかかるはしご 天使になった子どもと生きるグリーフサポートブック」



里桜（りお）ちゃんは2009年4月に生まれた。出産時、羊水中に出た胎便をのみ込んで呼吸状態が悪くなる胎便吸引症候群に。4日目、初めて



抱っこをした札幌さんの腕の中で息をひきとった。

手記では、親子の幸せな光景に目を背け、「子育て中の人に黒い気持ちを持った事もある」と正直な気持ちも書きつづった。自分の感情にふたをせず、思いのまま過ごしていいと伝えたいと考えたからだ。



里桜ちゃんにはいま、小さな弟がいる。公園で年上の女の子と遊ぶ姿を見るとき、他人に「子どもは1人？」と聞かれるとき、悲しさや悔しさ、うらやましさとともに長女を思う。「悲しさは消えないが、同じような経験をした方の文章を読み、生きていく道筋を見いだせた。冊子を通じ、少しでも光を感じてくれれば」

50年前に白血病のため12歳で亡くなった大場弘くんの家族も参加した。福岡市南区に住む母親の大場和代さん（88）は、弘くんの弟らが小川で取ってきたメダカの子孫を大切に育ててきたといい、その写真を載せた。添えられた一文は『「こんなに手を掛けて愛情を注げるのは 息子と過ごした時間があったから』 力を与えて、いつでも励ましてくれる、ちいさな紳士のひろしくんは、今もお母さんのそばに」。

#### ■がん・交通事故…22家族

九州大大学院医学研究院の濱田裕子准教授（小児看護学、家族看護学）が中心になってまとめた。きっかけは脳腫瘍（しゅよう）で長女を亡くした母親の「ひとりじゃないと思えるような冊子がほしい」との言葉だった。

昨春から準備を始め、趣旨に賛同した福岡、佐賀、熊本、兵庫の4県の22家族が参加した。小児がんや先天性異常、交通事故、突然死など、亡くなった理由や年齢はさまざまだ。

家族の手記や専門家からのメッセージのほか、簡単なエピソードを添えた、思い出の品や風景の写真もある。つらさゆえに手記が読めない家族でも、手に取って思いを重ねられるように考えたという。

2015年の国の人口動態統計によると、0～19歳の死亡数は4834人。1950年は約27万人いたが、年々減っている。

濱田准教授は『子どもの死』が社会から見えなくなっているぶん、思いを周囲に理解してもらえず、家族は孤立しがち。さまざまな理由で亡くなる現実があることを知ってほしい。

冊子は全143ページ。1200部づくり、子どもを亡くした家族に配布している（残数10部）。5月14日には家族の交流会も開かれた。8月中旬以降、九州大学出版会から発刊予定。問い合わせは同出版会（092・833・9150）。（山下知子）

## 障害者 地域とつながり19年 「仲間たちの家」移転控え感謝祭



中日新聞 2017年7月3日  
「それいけ仲間たちの家」で開かれた感謝祭＝金沢市扇町で

障害のある人たちの活動の場として金沢市のNPO法人「地域支援センターポレポレ」が同市扇町で運営してきた「それいけ仲間たちの家」が移転することになり2日、地域や支援者に感謝するイベントが開かれた。100人が集まり、19年の歩みににぎやかに締めくくった。（日下部弘太）

障害のある子どもが中学を卒業した後の行き場をつくろうと、一九九八年に開所。会員の親戚が持つ江戸時代末期の町家を借り、知的障害の人を中心に織物や藍染め、イラスト入りメモ帳など雑貨作りをしてきた。毎年秋にはバザーも。手狭になったことなどから、移転を決めた。

管理者の菊義典さん（41）は「地域のいろんな縁やつながりがうれしかった。生き生き暮らすことができ、ありがたい」。

最後のイベントは「それいけ かんしゃさい」と銘打ち、思い出の写真を展示。カレーやたこ焼きの振る舞いもあり、利用者や家族、地域住民、ボランティアらで家の中も外も大にぎわいになった。

創設メンバーの一人、宮文子（ふみこ）さん（65）は次男の悠貴（ゆうき）さん（31）が通った。故・三笠宮寛仁親王が視察されたとき、レシート好きな悠貴さんが殿下のかばんにまで手を入れてレシートを探したエピソードを楽しく振り返った。

移転先は歩いて五分ほどの横山町内。来年四月から活動を始めるつもりで、菊さんは「地域に向けて教室を開くなど、交流もしていけたら」と期待を込める。

宮さんは「私の地元で、知り合いがたくさんいる地域。お年寄りも子どもも一緒に集える場所になれば」と展望を語った。

## 出雲・障害者自立支援事業所の壁画完成 多伎中美術部員描く



山陰中央新報 2017年7月3日  
壁画を前に事業所の職員と談笑する多伎中学校の美術部員

島根県出雲市多伎町多岐の多伎中学校の美術部員7人が、近くの障害者自立支援事業所「ぼんぼん船」の壁画（縦3.3メートル、横8メートル）に描いた絵が完成した。15年前に同校美術部員が手掛けた絵が消えたため、同事業所が制作を依頼した。生徒数減少に伴う部活動再編などに伴い、6月末で活動が最後となった同部部員は、思いを込めた絵が残り続ける

ことを願った。

絵は2002年に当時の美術部員が制作。16年に壁の一部が崩れた後、白く塗られていた。同事業所は、以前のような施設のシンボルになる壁画にしたいと、現役部員の力を借りることにした。

要請を受けた3年生7人がデザインを考え、5月末から6月上旬に3日間作業。日本海を泳ぐ赤や青、オレンジ色などをしたイルカ、風車といった「多伎町らしさ」を表現した。

30日、事業所を運営するNPO法人ぼんぼん船の石飛丈和理事長（62）から感謝状を受け取った部長の渡部琴巳さん（15）は「寂しい気持ちもあるが、最後の活動で作った壁画はずっと残っていてほしい」と笑顔を見せた。

同校美術部に在籍したことがある石飛理事長は「美術部の皆さんに記念になるものを残したかった。夢のある絵を描いてもらった。補修しながら残していきたい」と誓った。

#### 四国中央・地域とつながる居場所を 中心商店街に知的障害者の作業所オープン



愛媛新聞 2017年7月3日

四国中央市の新町商店街にオープンする「B型事業所4ぶんの3」。左側が作業時間外にくつろげるスペース

障害者があるのまま生きていくことができる居場所に一。四国中央市のNPO法人「ふかぶか」が手掛ける就労継続支援施設「B型事業所4ぶんの3」が3日、同市三島中央3丁目の新町商店街にオープンする。知的障害者が小物作りなどの作業に取り組む。

「ふかぶか」は2013年、旧みしま親子ホーム（現在は子ども若者発達

支援センターに統合）に通う障害児の保護者や保育士らが設立。「相談さぽーと 『夢の種』（同市豊岡町大町）で障害児・者の相談支援事業を行っている。

多くの人の理解促進につなげようと、市中心部での事業所開設を計画。新町商店街の西側入口近くにあったブティックを改装した。通行客が見やすいよう、ガラス張りの造りをそのまま生かした。

対象は18歳以上で、定員20人。利用者4人でスタートし職員4人が支援する。紙加工製品の袋詰めのほか、布でくるんだボタンや牛乳パックのはがきなど小物作りに取り組む。作業時間外にくつろぐスペースも確保した。

事業所名は、同法人で相談支援専門員を務める元市職員西森法子さんのオリジナル楽曲「4分の3の未来（あした）に」にちなむ。根底には「年齢的に親が子どもに寄り添うのには限界がある。人生80年のうち20歳以降の60年は、周りの手助けを受けながら自分で生きていってほしい」との思いがある。

NPO法人の石川かおる代表理事（52）は「少女の我慢も覚えながら、楽しく過ごせることが第一。仲間みんなで盛り上げていきたいし、地域の人にも温かく見守ってもらいたい」と話している。

#### 重度障害の男性がボランティア喫茶 神戸・灘

神戸新聞 2017年7月3日

神戸大大学院のサテライト施設「のびやかスペース あーち」（神戸市灘区岸地通、灘区民ホール内）で、脳性まひのため四肢などに重度障害のある吉田収さん（60）＝神戸市灘区永手町＝が月1回、ボランティアでコーヒーを振る舞っている。「あーち」は子どもや高齢者、障害者らが交流する場で、吉田さんは「地域で暮らしていると実感できる」と力

を込める。

吉田さんは、同大国際人間科学部＝同区鶴甲＝の障害者らが働くカフェ「アゴラ」で、2008年から15年までマスターをつとめた。大学生らと協力してコーヒーを入れる吉田収さん（中央）＝神戸市灘区岸地通、「のびやかスペース あーち」

「コーヒーをこぼさず、均一に入れる作業は、自立への一歩だった。カフェでは、責任ある仕事ができ、生き生きしていた。今度は自分が大学や地域に恩返しをしたい」。そんな思いを、同大の担当者に相談したところ、快諾を得て、今年1月から毎月第3金曜、「あーち」に喫茶コーナーを設けることになった。

吉田さんの喫茶コーナーは午後5時ごろからで、20～25杯分を用意。吉田さんは、訪れた人に、コーヒーを飲んでもらいながら、会話も楽しんでいる。

今のところ、ほとんどの作業を吉田さんがしているが、「いろいろな人と協力してコーヒーを入れて、飲んで、楽しみたい」と話している。

問い合わせは神戸大大学院のヒューマン・コミュニティ創成研究センターTEL 078・803・7970（斎藤雅志）



#### <宮城陸上選手権>知的障害者のレース新設

河北新報 2017年7月3日

県選手権出場に向けて練習する（左から）伊藤さん、菅野さん、高橋さん



宮城県利府町の宮城スタジアムで開かれる県陸上選手権（7月8、9日）に、初めて知的障害者の男女100メートル各1レースが加わる。障害者スポーツは大会に限られ、これまでは出場機会がほとんどなかった。選手たちは「新たな目標ができた」と喜ぶ。

宮城パラ陸上競技連絡会の要望に、県陸上選手権を主催する宮城陸上競技協会が応えた。レースは9日に行われ、県内のクラブチームや支援学校の知的

障害者ベストタイム上位の男女8人が頂点を目指す。

県立支援学校岩沼高等学園の陸上部からは3人が出場。2年高橋成輝さん（16）と3年伊藤一真さん（17）は共に「自己ベストを上回る記録を出したい」と意気込み、1年菅野新菜さん（15）は「緊張するけど頑張りたい」と練習に励む。

これまでは春の全日本障害者スポーツ大会の予選会しか出場機会が無かった。浜中一道顧問（33）は「陸上部全員が出られるわけではないが、県選手権出場は子どもたちの大きな自信、目標になる」と期待を寄せる。

知的障害者の選手は介助が必要な場合があり、一般の大会に参加するのは難しい。大会が少ないため、社会に出てから目標を失って陸上をやめてしまうケースも多いという。

連絡会の藤島秀一事務局長は「大会が増えることで障害者スポーツを知らない人たちが陸上競技と出合うきっかけになればいい」と話す。宮城陸協の三浦弘則会長は「健常者と同じ条件でのレースは刺激になる。今後も継続し、リレーなど種目を増やせるかどうか検討したい」と応援する。

3年後の東京オリンピック・パラリンピックを前に、外国語による119番通報への対応を強化しようと、東京消防庁は民間の電話通訳センターに委託し、5か国語での対応を始めました。

3日は東京消防庁の総合指令室で訓練が行われ、指令管制官が電話通訳センターの担当者にポルトガル語で腹痛を訴える通報を訳してもらいながら対応する様子を披露しました。

東京消防庁によりますと、旅行や出張などで日本を訪れていて救急搬送された外国人は、去年1年間に管内で2336人と、4年連続で増加しているということです。

このため、東京消防庁は3年後の東京オリンピック・パラリンピックを前に、外国語による119番通報への対応を強化しようと、今月から24時間、民間の電話通訳センターに委託して、外国語での対応を始めました。

対応する言語は英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、それにスペイン語の5か国語だということで、東京消防庁総合指令室の長谷川新一管理係長は「2020年を前に、外国人の通報に迅速に的確に対応できる体制を整えていきたい」と話していました。

## 社説 バニラ・エアと車椅子 「もっとできる」の契機に 毎日新聞 2017年7月2日

格安航空会社（LCC）バニラ・エアを利用した車椅子の男性が、奄美空港で搭乗する際、タラップの階段を腕の力ではい上がっていたことが明らかになり、論議を呼んでいる。

バニラ・エアは男性に謝罪し、設備を整える対策をとった。ところが、逆に男性がインターネット上で、「確信犯」「クレーマー」などと非難・中傷される事態に発展した。男性が普段からバリアフリー化を求める活動に携わり、奄美空港での体験も積極的にメディアで発信したことが影響したようだ。

障害者差別解消法が施行されて1年以上たつが、「差別解消」とはほど遠い現実が浮き彫りになった。

同法は、障害の有無にかかわらず、個人が力を十分発揮できる社会を目指している。「合理的配慮」といって、過重な負担にならない範囲で、障害者の行動の妨げを取り除く努力を行政や企業に義務付けた。

今回のバニラ・エア問題で最も問われるべきは、同社ができることをしようとしたか、つまり合理的配慮に怠りはなかったか、という点だ。

バニラ・エアの社内規定は、客を車椅子ごと抱えてタラップを上り下りする行為を禁じていた。奄美―関西便は、介助があっても歩けない障害者の利用を断っていたようだ。

しかし、同社はこの問題が報じられるや、椅子型になる担架を導入し、その後、階段昇降機も設置した。やろうと思えばできたことを、していなかったに過ぎない。

男性への非難には、「LCCではなく、設備の整った航空会社を利用すればいい」というものがある。だが、運賃が安いから障害者はあきらめよ、という理屈は通らない。障害者への支援体制が充実したLCCはたくさんある。

男性が、車椅子の利用をあらかじめ航空会社に伝えていなかったことも批判されている。交通機関が、支援の準備をするため事前の連絡を求めるのは一般的だからだ。

ただ、マニュアルは最小限の手引である。個人によって異なる事情に、可能な限り対応しようとする備えと柔軟な心が肝心だ。

バニラ・エアに限らない。障害の種類もさまざまである。今回の出来事を、「もっとできること」を考える契機としたい。

